

キリスト教会内のハラスメント対策についての一考察

カルトとは何か。その定義について確認したい。

カルトとは、その宗教、その集団の教義、教理に関することではなく、違法行為や人権侵害を行う集団のことである。その定義に当てはまるかどうかはカルトであるかの境界である。

ただ特定の団体をカルトとみなすか否かの境界線をはっきり設定することは難しい。というのは、こういう見方もある。カルトか否かはグラデーションのようで、どれくらい濃いグレーなのかという問題だと。その意味で、グレー度によりカルト的、カルト性が強い、カルト化という表現が用いられることもある。

さて、そのカルトと、正統的キリスト教として今日活動中のキリスト教会、様々な教団、教派も含めての、正統的キリスト教会とは無縁なのかと言う問いかけが、本小論のテーマである。

というのは、筆者自身が、マルチン・ルターの宗教改革によってカトリック教会から分かれプロテスタント教会の代表的教会として今日まで歩んでいる教会の1つである、その教会指導者からの脅迫、人権侵害、恐怖政治的なことを経験させられたからである。

その結果、同教会を離れ、現在は新たな教会の牧師として奉仕させていただいているが、筆者自身が脅迫、パワーハラスメントを受け、人権が侵害されて退職に直面したとき、過去60年にわたる教団トップからの脅迫、いわゆるパワーハラスメントの経験を多くの方々が吐露し始めたのである。これは衝撃であった。特に同じ教会で働かれた引退牧師や、その家族から、「パワハラはあったんですよ」「教団トップから退職を強要された」「給与を規定以下と言われました」といった様々な高圧的な出来事、人権侵害、脅迫体験の証言を得ることになった。

本小論において、教職信徒の方々の受けた経験、証言から、正統的キリスト教の1つである教会内において生じた脅迫事案、人権侵害、パワーハラスメントにつながる様々な事案を紹介したい。そしてそれらがカルト的要素を持つものでありながら、正統的キリスト教会という「看板」が掲げられているゆえに、キリスト教界内ですら、その事案に気づけない現実が浮かび上がってくる。宗教改革時代の初穂である正統的プロテスタント教会であればなおさら、誰からも、どこからも問題のある教会とは見なされない。

しかしカルト性が強まっていく中で、そのために解決に向かおうとする声が

当該教会内から上がったとしても、押さえつけられてしまうという現実があり、追い打ちをかけるように加害者的な立場からのさらなる執拗な攻撃、高圧的な言動がますますエスカレートし、問題解決に向かって声を上げていく方々が、その教会から精神的に追い込まれ、あるいは教会から追い出されてしまう事案があると言える。それらのことに光を当てたいと願う。さらに、カルト化問題とは、正統的キリスト教会内でこそ、深刻になる傾向があるという認識を広めたいという願いと祈りをもって、これからの対処方法、啓蒙について、所見を述べたいと思う。

さまざまな事案—60年の歩みの中で—

先に述べたように、筆者自身の退職を機に、過去60年にわたって、教会成立の初期から看過できない事案が発生していたとの証言がようやく「声」になってきた。その具体的事案を、体験者の証言をもとに紹介したい。尚、以下の証言以外に数多く寄せられていることも付記しておく。

事案① 60年前、教会総会の場での出来事である。当時20歳の医学生であったT氏が議場で質問をされたとき、当時伝道師であった師より、恫喝された。このことが60年を経てもなお心の傷として残っているとのことである。筆者において恫喝、脅迫の事案を聞いた時、60年前の出来事を初めて吐露され、未だにそのことが思い出され、苦しむことがあるとのことであった。今日で言われるPTSD的症状であると思われる。

事案② 1982年から83年にかけて、M牧師が当時の教団トップ、議長からパワーハラスメントを受けた。そのことで退職し、新たに開拓伝道を始められた。この出来事について、その当時、公に教会内で共有されていたことは、退職したM牧師がどれほど悪事を働いたかという情報しかなかった。しかし今回、筆者の出来事を通して、「私たちもパワハラを受けたのです」と当時のことを初めて吐露された。

事案③ 1987年頃、M牧師が当時教団トップ、議長、副議長から執拗な攻撃を受けていた。それは人事派遣の中で露呈され、既成教会への人事異動ではなく、新たに開拓伝道を命じるものであった。それは教団トップのM牧師への攻撃であり、見せしめ人事であった。

事案④ 1987年頃、牧師を目指していた伝道実習生E氏に対して、教団

議長による脅迫事案があった。筆者は当時高校生であったが、その場面を目撃してしまい、目の前で起きた出来事に恐怖を覚えたものである。後に、E氏は退職させられた。

事案⑤ 1993年頃、牧師を目指していた伝道実習生T氏に対して、教団議長による脅迫事案があり、退職へと追い込まれていった。T氏は教会を去ってしまい、現在音信不通である。

事案⑥ 1991年から1993年にかけて、牧師を目指していたN氏に対して、執拗ないじめ、攻撃があった。N氏は神学校を卒業したが、伝道師としても認められず、一職員扱いにされてしまう。しかも、給与面などで教団議長、副議長から本来支給される職員の給与規定以下の給与にされてしまい、退職へと圧力をかけられていく。間もなく退職され、自ら開拓伝道を始められた。

事案⑦ 1996年から97年にかけて、牧師をされていたH師と、T師が、教団議長、副議長から呼び出され、教勢が伸びないことを理由に、退職勧奨される。特にH師においては、当時奉仕されていた教会の役員を教団議長、副議長が呼び出し、議長、副議長によるものではなく、役員による退職勧奨の形にさせてしまい、H師は退職された。このことに関わった教会役員は召されるまで「だまされたとは言え、私がH師を退職させてしまった」ことで苦しまれたとのことであった。またT師は、一旦退職の形をとり、続けて囑託という形で無給で働かれた。両師とも、退職勧奨された際、65歳定年になっていなかった。

事案⑧ 1997年、牧師をめざし、神学校を卒業されたT師が、教団議長により退職勧奨を受ける。後に、退職させられてしまう。

事案⑨ 2007年、牧師をめざし、神学校を卒業されたM師が、教団議長、副議長により退職勧奨される。退職に関して、本人からの意見聴取が全くなされず、一方的な形で退職させられてしまう。またそのことが当該教会員には全く知らされず、前週に礼拝に集われた教会員がその次の週の礼拝に集われた時、すでにM師は引っ越しをし、牧師館には居住していないという前代未聞の出来事があった。送別会もなく、本人への退職金もなく、引っ越しの費用約20万円のみが支給されたただけであった。M師は抗議をしたが、全く取り合ってもらえなかった。

事案⑩ 2014年、宣教団体の1つであるノルウェーの宣教師に対して、教団常議員の1人が恫喝と脅迫を行った。宣教師は何も言うことができない状態に追い込まれていた。後にノルウェー宣教団体との関係は解消されてしまう。しかしこの時の公式な説明は、「私たちが慰留したにも関わらず、一方的に関係を解消した」との説明であったが、その事実はなく、ノルウェー宣教師に対するパワーハラスメントの事案の発生である。

事案⑪ 筆者自身のことについて述べてみたい。母教会の牧師として1978年に赴任された牧師とのことである。当時、小学校3年生であったが、教会学校に来ると、牧師はいつも筆者自身を抱きしめ、時には頬にキスをすることがあった。当時スキンシップの1つとして受け止めていたし、子どもであったために、事の内容を認識できなかったが、今振り返ると、重大なことであったと言わざるを得ない。1983年頃から、牧師の態度が変わっていくのが感じられた。教会員の首を絞めたということを、牧師の家族（子）から知らされ、驚いたこと、1986年に来られた伝道実習生に対する脅迫場面を目の当たりにしたこと（今でいう面前DVにあたる）、教会員の方々から、「牧師先生に本当のことを言ってはいけない。先生は怖いから」という声を聞くようになった。当時この意味がよく理解できず、牧師先生の言うことは、神さまの働きをしておられるのだから、先生のおっしゃられることは聞いて言われたことに応えていくことが必要だという認識があった。またその先生の良いところを見つけようともしていた。しかし当時、自身のことを気遣ってくれた教会員の方がいたこと、暗に守ろうとしてくださったのではないかと思われる大きな出来事であった。やがて教会員の中で、医師、大学教授といった方々は、牧師とは一切かわりたくないという理由で、他教会に移って行かれた。

一方で筆者自身は、教会への帰属意識、また生まれた時からの教会という愛着もあり、そのような状態になっても、牧師に気遣うようになっていたのではないかと今振り返れば思う。牧師がどういう牧師であっても、「神さまが立ててくださった」という思いがあり、また自分自身が生まれ育った教会であることともう一つの家という意識があったからこそ、別の教会に移るということなどは、全く眼中になかった。その中で、波風を立てないように、牧師の顔色をうかがい、牧師の喜ぶことを、計算しながら、教会生活をしていたのではないかと感じている。

やがて牧師から、高校生の時、「Sくんは将来教職にしたい」「10年勤めれば奨学金は免除になるよ」と言われ、教会の牧師になったらどうかとの勧めを頂く。しかし丁重に断り学業を終えて、一旦は小学校の教員として社会で働くも、聖書の言葉に示され導かれて、牧師を目指すこととなる。その時、母教会

員の方々から、「この教会で働くのか？」と涙ながらに止めようとされた方あり、「この教会の教職の多くは他教団で採用されなかった方々だ。他の教団の方が良いのではないか？」「本当にこの教会でやっていくのか？」といった心からの声をいただいた。しかし当時は、その声とその背後にあるものが、どういうことなのか十分に理解できないまま、聖書学院、神学校での学びに入ることとなった。その生活の中で、母教会内での牧師の評価と、神戸や、教団内での評価がまるで異なる印象を受けた。「素晴らしい先生だとか、大きな教会の牧師先生だとか、教団の要職を長年務めておられる方だ」とか、様々に良い評価をされていることに、戸惑いを覚えた。同時に、その評価はどこから来るのかということ考えた時、牧師は、同じ教会また他教団の牧師と良い関係を築いていたことが理由として言えるだろう。それはそれで素晴らしいことだと思う。ただ、牧師について、その幼少期、成長過程を推測するに、肩身の狭い生き方をしてこられたのではないかと思う。というのは、牧師はアルビノと呼ばれる先天性白皮症であり、それゆえに視力が非常に弱い状態であった。今でこそ受容されつつある社会であるが、1940年代、50年代の日本では、先天性白皮症といった方々を理解し、受容してくれる受け皿は現在とは大きく異なるものではなかったかと考えられる。そのような中で、人権擁護の考えが浸透していなかった時代、牧師の周囲を取り巻く様々な環境の中で、自分を守ろうとする心理が働き、自己防衛意識が非常に強かったのではないかと思われる。それゆえに、自分自身の評価を高められる術を身に着けながら、それを実践してこられたがゆえに、ある面評価を高めてきたと言えるだろう。また1つの具体例としては、母教会を会場にしてプライダルの事業を展開し、同じ教会の牧師の多くを、その働きに従事させていたのである。つまり、同労者でありながら、その牧師は、同時にプライダルの雇用者となり、その繋がりをもって、支配していたのではないかとさえ感じることであった。ただ筆者自身には、プライダルの誘いは1度もなかったが、そういう牧師の教団内での地位、立場、同じ牧師からの高い評価の中で、筆者自身が牧師から受けたことを封印し続けてきたことである。それは1教会員と牧師との関係から、同労者としての関係になり、同時に組織のトップであり、自分自身の上司となっていたことが大きい。筆者自身も、組織への従順、上司への従順によって、自分の身を守ろうとしていたと言えるだろう。しかしそれは、キリストの体である教会の頭である、キリストに対して従順ではなかったのではないか。むしろ、いろいろな要因、理由はあっても不従順ではなかっただろうか。

そして、時を経てパワーハラスメントが2017年2月末に起こるに至る。教団トップによる脅迫であり、恫喝であった。その日を境に体調を崩してしま

う。その時の教団トップは、1960年代から90年代に至るまで教団の要職を務めていた牧師の二世が多くを占めていた。つまり、60年前から人権侵害、パワーハラスメントを繰り返してきた彼らの父親である牧師たちと同じことを、その二世牧師も、繰り返したのである。このパワーハラスメント事案について、当事者はもちろん認めてはいないし、現在も公式にはなかったこととして扱われている。再調査せよとの動議が、2019年3月教会総会において出されたが、教団議長は再調査しないと答弁し、この問題をもみ消そうとしてしまう。それは、パワーハラスメントが教団トップによって発生したこと、その当事者が組織の代表者であること、しかもキリストの愛を説くキリスト教会、まさに宗教改革の代表的教会において、起きた出来事であるがゆえに、組織を守る側としては、断固としてその事実をなかったことにしたいというのは、その通りであろう。それゆえに、詳細を明らかにするようにとの意見具申にも耳を傾けられなくなり、かえってその声を上げる方々を抑え込んで、追い出そうとする、力による支配が起こったことである。その姿は、暴力と人間の著書に表されたことと同じようなことではないだろうか。

同時に言えることは、教会という組織を死守するために、牧師としての立場を守るために必死の抵抗の姿であるということである。その証拠の1つとして挙げられることは、筆者が退職後、教団議長の、神学校理事会の場での発言に注目したい。「筆者のことについて、いろいろ噂を聞くかもしれないが、常議員会の言うことだけを信じてください」この発言である。その場に居合わせた理事、オブザーバー団体の代表者の中で、この言動を逆に不審に感じたという証言もある。この発言も組織死守のための情報規制にあたると言えるのかもしれない。

前後するが、筆者の退職の知らせを受けた既に引退されていたI師の家族より「パワハラはあったんですよ。私たちもパワハラを受けました」と吐露された。これまで口にされたことがなかったことを筆者に語ってくれた。「パワハラはあったんですよ」との声は衝撃であったし、「この先生までもが教団トップからパワハラを受けていたのか」と思ったことであった。つまり、筆者のことが起こるまで、退職されていてもなお支配的、暴力的な指導者の下に置かれていたということである。そのために、思っていること、言いたいことがあっても言えなくなっていたということである。パワハラを受けても、声を上げることができなかったのである。引退されても言えなかったのである。これは由々しきことであると言わざるを得ないし、グリーンズの「支配的・暴力的な指導者の下に置かれると、人はいつしか従順という姿勢を取る」との言葉に合致すると言わざるを得ない。いわゆる思想統制が敷かれ、長く奉職された牧師を始め、

信徒の方々をこれほどまでに苦しめていたものであることに、改めて気づかされている。

このこととは別のことであるが、神学校校長から、「お母さんのおっばいをしゃぶりに来たのか」と言われたことがあった。この言葉は、母教会で筆者自身を覚えて幼少の頃から祈りに覚えてくださった姉妹の葬儀に参列した際、同じ会場に向かっていた校長からの、教会近くの駅で顔を合わせた際の言葉であった。「お母さんのおっばいをしゃぶりに来たのか」と言われた瞬間、凍りついたし、驚いたことは言うまでもない。しかし、神学校で教鞭をとられている教師であり、教会内で、波風を立てたくないという思いから、この出来事は自身の中に、封印されることになった。

2013年頃、教団議長から、ルター小教理問答書を否定されたことがあった。「なぜ小教理をするのか。そんなにしなくてもよいではないか」と問われ、驚いたことであった。当時筆者自身が教会において、一人一人ないし、数人と小教理問答書の学びを続けていたときであった。学びの中で気づかせられた数々の恵みがあったし、喜びと感謝のひと時であったことである。ところが、教会における必要不可欠な学びをなぜ否定するのかと知ろうと思ったが、できなかった。未だになぜ否定されたのか、その理由は定かではないが、教会における聖書の学びの手引きとして、大切な学びを否定することは、教会を否定することではないか。教会のトップとしても、個人的であっても、筆者にとって忘れられない出来事であった。

証言・事案を通して見えてくるもの

これらの証言、体験を通して見えてくるものは、組織の在り方とか、パワーハラスメントの相談窓口を設けると言った、そういう窓口を作り、解決をはかるといったこと以前の、人としてどうあるかというところに問題の根があるのではなからうか。同時にキリスト教会において、正しく福音を聞き、福音を福音として、どう受け取ってこられたかにも深くかかっているのではないかということである。つまり、導きの中で、キリスト教会を訪ね、イエス・キリストを信じて洗礼を受けたことは神の恵みであるが、その恵みとして受け取られた福音を、どう受け取り、罪赦されたことを人としてどう生きているか、その人の内に、福音がどう反映され、生きたものとなっているのかが、問われているのではないだろうか。

確かに洗礼を受けたことは間違いない。それは恵みである。しかし、その時福音が福音として届いているかということから見れば、福音が福音として届いていない状態のまま、やがて牧師として教会の働きを担うことになり、教団の中で立場を強め、託された権威を誤解し、権力を間違った理解に基づいて、ふるってしまった結果、様々な力に基づいた支配、それこそ人権侵害につながる出来事になっていったのではなかろうか。しかし、そのことを指摘されればされるほど、頑なになってしまい、それらのことをなかったことにしたいがために、さらに頑なになり、人権侵害がますますエスカレートしていくという負の連鎖が続いてしまうのではないか。それが暴力となり、暴力をする側、加害者となっていくのではないか。その影響は、牧師二世にも、同労者である牧師、信徒にも及んでいく。しかも同じことが、教団内で繰り返されていくのではないだろうか。それが60年続いていることゆえに、問題の根は深いと言わざるを得ない。またプロテスタント教会の代表的教会という看板があるために、その看板が、カルト化の隠れ蓑になっているのではないだろうか。

そこからの解放は、同じ組織内にとどまっている限り、難しいと言える。大なり小なり教団トップによる「思考停止」の下で、その組織に属する教職、信徒の中で思考停止させられていることすら気づいていない、気づくことができなくなっていると思われるからである。なぜならば、目の前で起きている出来事がどれほど一般社会常識からかけ離れていることであっても、それが教会という閉じられた社会、空間、そして正統的キリスト教会という看板に、ある意味「守られて」長期に続いた結果、それに慣れてしまい、あるいは感覚が麻痺してしまっているからではないだろうか。見方を変えれば、感覚が麻痺した状態でないと、その教会では教会生活が続けられなくなっているのかもしれない。筆者自身がそうであった。教団という組織から離れて（脱出できたと言っても過言ではないが）、初めて自分自身の置かれていた状況、一般社会的に言えば職場環境がいかによがんだものであったかに、その組織を出て、その組織の外から見て初めて知ることになったのである。

啓蒙活動について

正統的キリスト教会という看板を掲げ、様々な活動しているキリスト教会内でも様々な問題があると聞く。その詳細については、今後明らかにされることと思うが、少なくとも筆者自身が身を持って経験できたことも、神の摂理の中にあり、その出来事を通して、同じような状況にある牧師、信徒の方々にとって、一助となるものを提供できれば幸いである。

その組織を離れ、別のキリスト教会に移ることも選択肢として提供することも大切である。一旦悪循環に陥ると、その組織内の自浄作用は期待できない。ましてパワーハラスメントといった人権侵害を行った当事者は、自分自身がそのようなことをしたという意識は全くないと言っても過言ではない。しかも意見具申しようとするほど、逆にその組織内で攻撃される可能性が高い。しかし同時に言えることは、教会に帰属意識が強ければ強いほど、また人一倍協力的で、神さまのためにと一生懸命に励んでおられた方々にとっては、従順が前提とされた世界から抜け出すことができないでいるだろう。そういう意味で、マインドコントロールされているのである。もちろん、喜んで従うということ、聖書の御言葉を信じて従うことを否定するものでは決してない。ただ、その従順が聖書の御言葉に従順のつもりでも、その組織のトップに従順ということにすり替わってしまうことがあるのではないだろうか。つまり、キリスト教会という本来、キリストにあって罪赦され、愛された者同士のつながりであるはずの共同体が、組織化と管理化される中で、その教会の指導者のリーダーシップの中に、その指導者イコール神、というマインドを挿入されてしまうことによって、起きているのではないか。その際、教会への帰属意識が高く、人一倍協力的で、従順な方々であればあるほど、神さまのために、が、イコールその属している教会のためとなり、その教会のために、が、その組織のトップのためになり、その組織のために働くという、組織の一つの歯車となってしまうのではなかろうか。しかしそれにすら気づかず、感覚が麻痺しているがために、どれほど問題を抱え、権力に固執する指導者がいても、また高圧的な暴力の存在があっても、状況がつかめなくなっているのではないだろうか。それゆえに、そこからなかなか脱出できないでいる方、教会内の問題を打ち明けることすら、自分自身の中で、阻んでしまう傾向が強い。このことが問題をますますエスカレートさせ、ますます複雑なものになってしまうのではないだろうか。

では、どうすればよいのだろうか。

答えはまだ見つかっていない。少なくとも筆者自身にはまだ見いだせていない。しかし教会という組織における様々な出来事、その中で長い間苦しみ続けてきた方々を思う時、筆者自身の経験できたことが、少しでもご用のために用いられたら幸いである。

こうした問題に光があてられること、分析など様々なことは、まだスタートしたばかりである。しかし、様々な問題を起こす要因となる、権力に固執する指導者、自分が弱い者であるにもかかわらず、それを見せまいとし、そういう自分を守ろうとする心理機制が、威嚇、攻撃、暴力といった強い反応を引き起こしてしまうこと、それに無条件で従ってしまう教会が誕生してしまったこと

である。そこにはたといキリスト教会であっても、そこに属する一人一人が、組織化、管理化された組織を、無条件に受け入れていかざるを得なかった空気感、しかもそこに、「神さまが」という主語が挿入されることによって、権力に固執する人間をある意味、絶対化させてしまう一助になっていたのではなからうかと分析されよう。それによって、正統的キリスト教会でさえも、いや、正統的キリスト教会だからこそ、カルト的要素が絶えず入り込む余地を孕んでいるのではないだろうか。このことは1キリスト教団、教会だけの問題ではなく、正統的キリスト教会すべてにおいて、同様のことが存在し、繰り返されてきていることがあり、未だ公にされず、光が当てられていない世界があるのではないだろうか。

こうした中で、暴力行為、人権侵害、パワーハラスメントをしてしまう牧師を、将来の牧師となりうる人材として推薦し、神学校に入学を認めた側の責任も問われなければならないだろう。

召しを受けたと手を挙げ、学び舎に入る前に、社会人として、人として、社会で人と関係を築くことができているかどうか、ただ牧師のなり手が少ないというだけで、安易に牧師にさせてよいものなのか、他教団で採用されなかった牧師を、受け入れてよいものなのかといったことなど、本当は牧師にはいけなかった人材を、牧師として「担ぎだしてしまった」ことについても、再吟味されなければならないことであろう。

それらのことを踏まえながら、正統的キリスト教会においても間違いがあることを公にすることである。しかしそれは何と難しいことだろうか。となると、その中で苦しんでいる方々のためには、どのようにすればよいのか、まだはっきりとは分からない。そういう意味で、正統的キリスト教会内におけるカルト化対策は、前例のない働きであると言えるだろう。試行錯誤しながら、導きを求めてやっていくしかない。

By Matsuda

参考文献

アルナ・グリューン「従順という心の病—私たちはすでに従順になっている」
ヨベル 2017

工藤信夫『暴力と人間』ヨベル 2018

田野大輔「ポリクラシーの政治力学—ナチ支配の解釈をめぐって—」
京都社会学年報 第3号 1995

根本正一「ナチ組織の特質と意思決定の相関—近代組織における中間管理者層の役割—」社学研論集 Vol. 18 2011年9月
筆者が所属していた教会員、並びに引退された牧師とその家族の証言